

使われなくなった
のこぎり屋根工場
今後を語る座談会

第十四回

報告書

のこぎり座

座談会内容

『ノコギリヤネ・ウツホモノガタリ』

日時、平成二十九年十一月三日

午後二時～四時

場所、のこぎり二

一宮市竈屋4-11-3

第十四回のご座 『ノコギリヤネ・ウツホモノガタリ』

日時 平成 29 年 11 月 3 日 14:00 ～ 16:00

場所 のこぎり二

今回は都市計画・まりづくり専門家、そして自称ノコギリアンの今枝忠彦さんをお招きし、「ノコギリヤネ・ウツホモノガタリ」という主題で話し合います。

「ものづくり」と「まちづくり」は表裏一体、不即不離。それを結びつける「ものがたり」。「起・産業コミュニティ」は、“ノコギリヤネ”のひとつの「ものがたり」である。いま、“ウツ（空）”・“ウツホ（空洞）”となった多くの“ノコギリヤネ”。その再生には、あらたな「ものがたり」が必要だ。二連・三連を主体とした“ノコギリヤネ”。それは「家内制手工業」の現場であり、「家族」と「仕事」という大きなテーマを内包する。ここから“ノコギリヤネ”の新たな「ものがたり」を紡いでいこう。称して、「ノコギリヤネ・ウツホモノガタリ」。

これは座談会前に今枝さんが僕に送ってくれた言葉です。この言葉から、今当たり前と思っている周りの物事には実は数え切れない触手が伸びていて、それをつないでいくことでたくさんの物語が生まれる可能性を感じました。今枝さんは度々のご座の「備忘録」を書いて送ってくれます。僕の「報告書」のお返事をしてきているようでとても楽しく拝見しています。その中では僕の意識に上がらなかったことが書かれていたり、僕が無意識に発した言葉や行動が細かく解説されていたりして、過ぎ去ったことを的確に意識の中で反芻させてくれます。僕にとっても大事な「備忘録」です。今回は今枝さんがプレゼン資料を丁寧に作ってくれたので、それに沿って報告書をまとめます。



0. “ノコギリヤネ” とワタシ／自己紹介を兼ねて

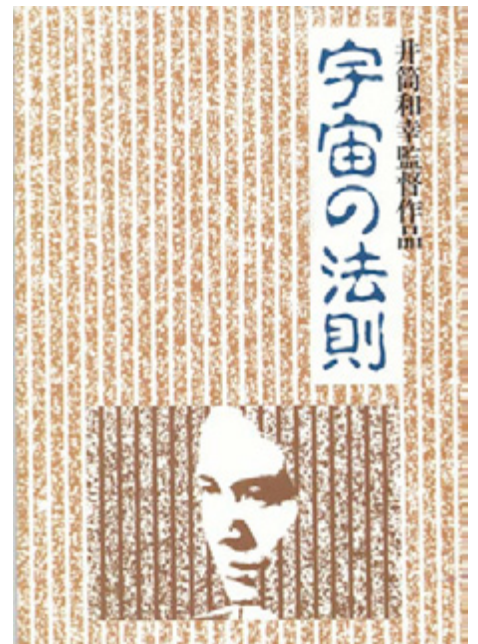
●原風景としての“ノコギリヤネ”再発見（2006.6.17 朝日新聞週末別冊版 be）

- ・ 25年後の故郷回帰
- ・ まちの音
- ・ ブリコラージュ
- ・ 中心市街地活性化診断助言事業
- ・ まちづくりシンポジウム
- ・ 地歴学講座



●25年前の“ノコギリヤネ”（高校同級生・小島敏弘氏の製作映画『宇宙の法則』1990年）

- ・ 冷戦構造の崩壊。
- ・ 日本経済の転機。バブル経済崩壊前夜。
- ・ 地方、ふるさと振興（リゾート法、地方拠点法等）



●“ノコオニ”からの招待状（第1回「のこ座」開催案内メール2016.10.11）

- ・ 言葉で伝えられないこと
- ・ 理屈を越えたもの
- ・ 稀人の誘い
- ・ 物語



0. “ノコギリヤネ”とワタシ／自己紹介を兼ねて

尾張地方の西北部、生家の周囲には鋸屋根工場が立ち並び、「ガッチャン、ガッチャン」という機音を聞きながら育った。市内に残る2,500棟もの廃業及び稼働中の鋸屋根工場を意識し始めたのは比較的最近のことである。地元から遠ざかって久しいこともあり、当初の関心は、「故郷（ふるさと）」への郷愁の思いが強かったが、あらためて地域を知り、いろいろな出会いを通して、単に“懐かしさ”に留まらない“複雑系”としての“ノコギリヤネ”（現役、退役の全ての鋸屋根工場）を実感することになった。

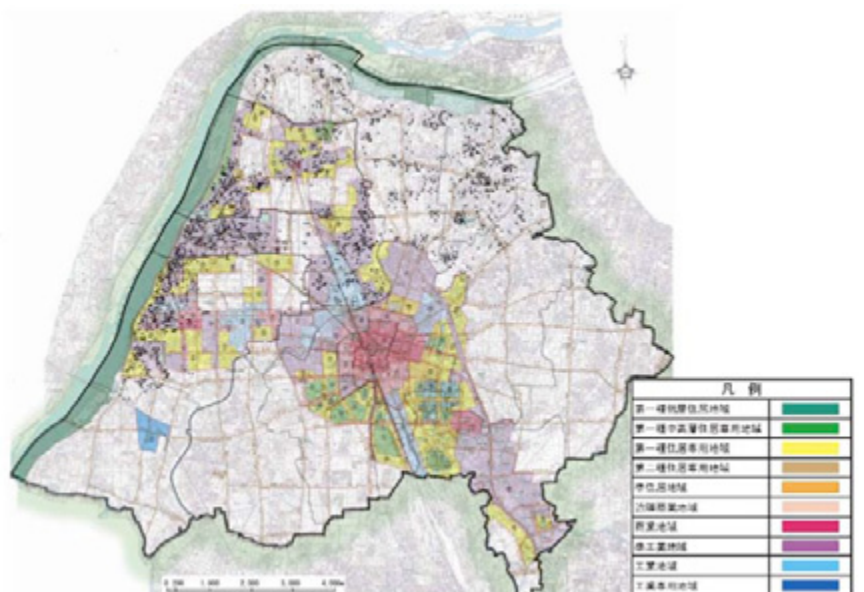
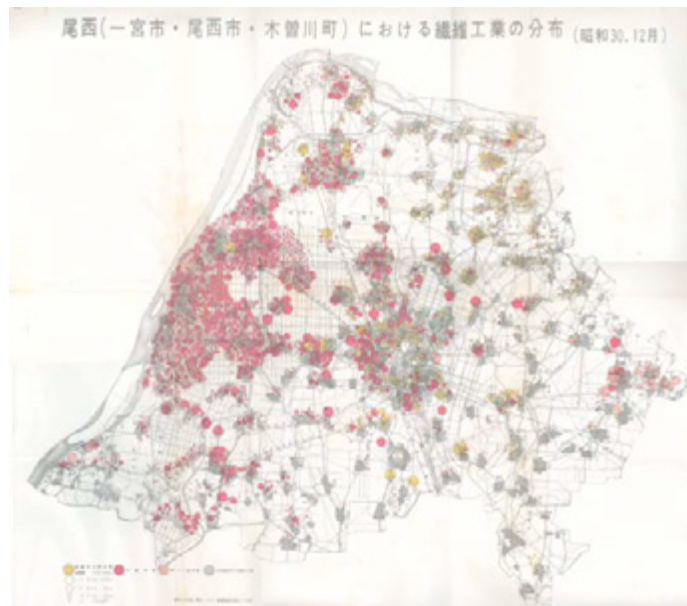
- ・ 原風景としての“ノコギリヤネ”再発見（2006. 6. 17 朝日新聞週末別冊版 be）
- ・ 25年前の“ノコギリヤネ”（高校同級生・小島敏弘氏の製作映画『宇宙の法則』1990年）
- ・ “ノコオニ”からの招待状（第1回「のこ座」開催案内メール 2016. 10. 11）

僕が初めて今枝さんにお会いしたのは一宮市民活動支援センターでのセミナーです。今枝さんが講演者で、起のことを熱く語ってらっしゃいました。こんな視点で起を見ている人がいることに驚きました。今枝さんは第一回この座の広告「ノコオニ」がお気に入りだそうで、独自にいろいろな意味合いを見出されています。あの写真は僕の妻ポーラを初めて工場に連れてきたときのものです。当時ゴミだらけだった工場の中に転がっていたプラスチックの鬼のお面をポーラがかぶってポーズしたので、ふざけて何枚も撮っていました。ポーランド人が鬼になって一宮の寂れた工場に立っていることにとっても面白い違和感を感じていました。その新しい「異物」がウツホモノガタリには必要なのだと今枝さんはおっしゃっています。



1. “ノコギリヤネ”の現在、過去、行方

- “ノコギリヤネ”の現在
 - ・ 鋸屋根工場の分布図 (尾張のこぎり調査団)
- “ノコギリヤネ”の過去
 - ・ 高度成長時代の毛織物工場分布図 (『一宮市調査報告書』)
- “ノコギリヤネ”の行方
 - ・ 都市計画図との重ね合わせ
 - ・ 準工業地域に集中



1. “ノコギリヤネ”の現在、過去、行方

尾張のこぎり調査団による「一宮市鋸屋根工場分布図」は、一宮市が鋸屋根工場の国内最大集積地であることを予感させる。そして、昭和30年代の毛織物工場分布図を見て得心が行く。その圧倒的な数と集積。しかし、絶滅危惧種の如く、この“ノコギリヤネ”群はやがて消滅する運命にあるのだろうか。都市の将来の姿でもある都市計画図に“ノコギリヤネ”の現在を重ね合わせることで見えてくるものとは。

- ・ “ノコギリヤネ”の現在（一宮市鋸屋根工場分布図）
- ・ “ノコギリヤネ”の過去（高度成長時代の毛織物工場分布図）
- ・ “ノコギリヤネ”の行方（鋸屋根工場分布図＋都市計画図）

のこぎり屋根の分布図と一宮市の都市計画図とを重ね合わせて議論が進みました。工場が建っている場所は大部分が「準工業地域」という地域で、住居、店舗、工場（危険性の高い大きな工場以外）などほぼなんでも建てられる地域です。現在の都市計画はもともと欧米から入ってきたもので、劣悪な住環境の改善や防災のためにつくられたものですが、工場が大規模な欧米とは違い、小さな工場や店舗が並ぶ一宮の町にはそこまで厳しい都市計画が必要ではなく、その結果振り分けられたのが「準工業地域」でした。この縛りが曖昧な準工業地域は自然発生的な日本の町に合っていて、工場群のこれからの発展にも障害になりません。政府も認める「なんでもありの地域」です。

今枝さんから「ノコギリヤネの思い出」と「建築家としてのノコギリヤネ」を質問されました。

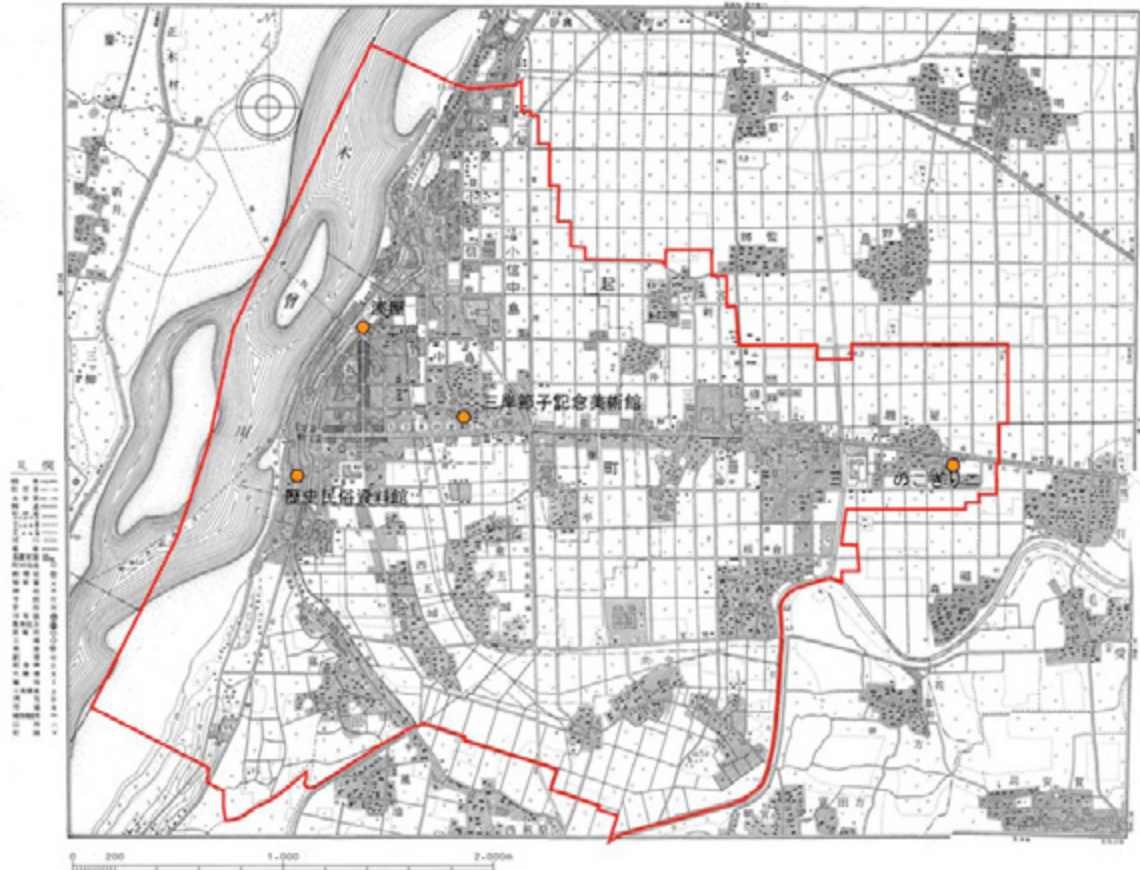
僕のノコギリヤネの思い出は祖父との思い出です。よくこの工場の中で二人でいろいろなものを作って遊んでいました。そのせいなのか、僕はよく友達におじいさんの匂いがすると言われていました。あの世代の人は独特の匂いがあったようです。

「建築家としてのノコギリヤネ」は難しい質問ですが、ブラックボックスを何も持っていないむき出しの構造体に魅力を感じます。自分の欲求や行為が知らない間に支配されてしまっている空間が多くなっている現代において、ここまで素直に対話してくれる空間はあまりないように思います。自分の力で変えられるもの、変えられないもの、変えてはいけないものを教えてくれている気がします。ただ、見慣れたものに魅力を見いだすのは容易ではなく、僕が本当にその魅力に気が付いたのは、工場を掃除して空っぽになったとき、工場の機能がリセットされたときでした。ウツホモノガタリの始まりですね。

2. 「起」の“ノコギリヤネ”

① 「起」という「まち」

- ・ 繊維産業集による近代化・工業化の先導地域
- ・ 起宿の中心性
- ・ 一宮及び尾張地方の周縁



昭和 30 年（1955 年）の起町地区に現況施設を付加

② 「起・産業コミュニティ」の形成（第一次世界大戦から戦後の高度経済成長時代）

○周縁部地域の自主独立意識

- ・ 江戸時代後期の綿織物から続く繊維産業集積
- ・ 綿織物から毛織物業への転換意識とそのための研究開発意欲
- ・ 好機（第 1 次世界大戦による輸入減少）＋外部連携（芝川商店等の大阪商人）

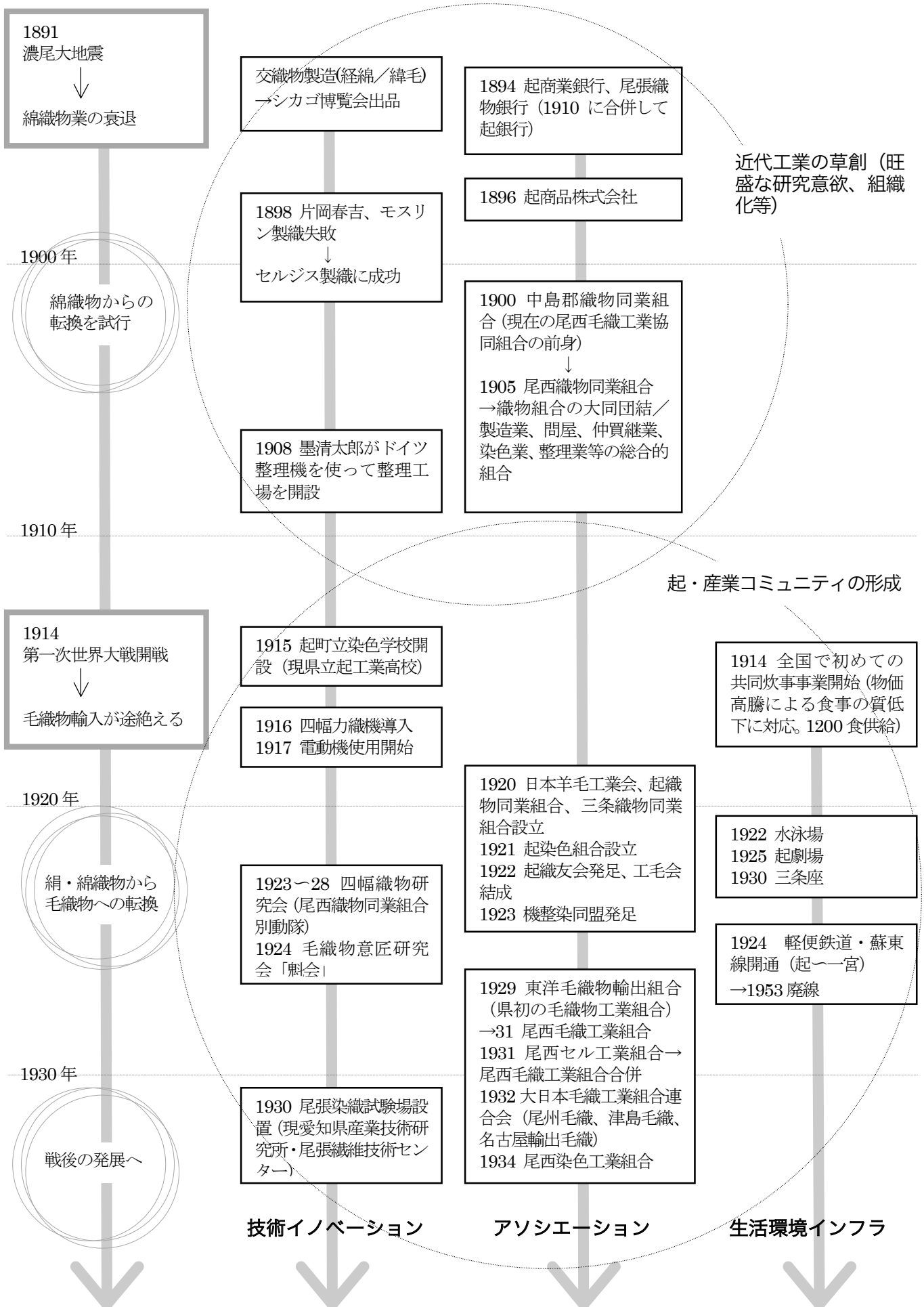
○「起・産業コミュニティ」の特徴

- ・ 尾西織物同業組合という主体（危機意識、研究、企画、事業化）
- ・ 町立染織学校（現県立起工業高校）による人材育成
- ・ 交通インフラ（蘇東線）の整備
- ・ 従業環境の改善（全国で初めての共同給食事業）

○繊維産業衰退の中でのポテンシャル

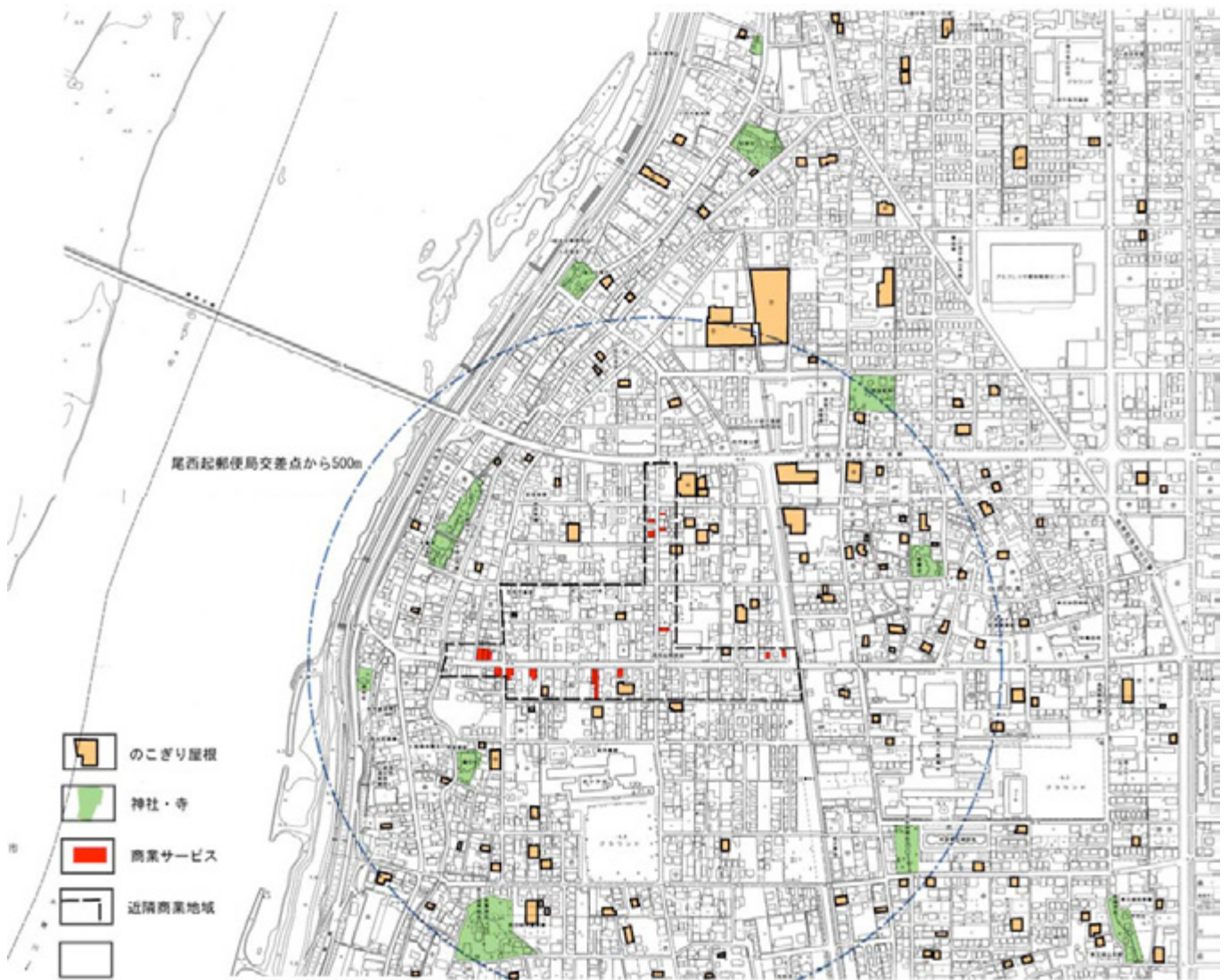
- ・ 機業の産業集積（人、設備、ネットワーク）
- ・ 美濃街道筋の文化集積
- ・ 木曾川の河川資源

● 「起」近代工業化のプロセス（起・産業コミュニティの形成）



③「起」の現在

- ・市街地の変化。1956年、1082年、2015年。
- ・繊維産業の衰退。工場数、従業者数が減少する中、出荷額は1985年あたりまで増加。
- ・“ノコギリヤネ”の現況。下図の中に、138の鋸屋根を確認。
- ・減少する“ノコギリヤネ”。例えば、美濃路界隈の動向（2005年→現在）。



2. 「起」の“ノコギリヤネ”

一宮市の中でも、とりわけ多くの“ノコギリヤネ”の残る「起」。美濃街道の宿場町に始まり、近代化の中で繊維産業の要衝地として発展した。毛織物産業の隆盛とともに、交通、教育、文化などのまちづくりも展開された。このような産業と生活の融合した「まち」を「産業コミュニティ」と名づけた。“ノコギリヤネ”に象徴される「起・産業コミュニティ」の盛衰を辿りながら、「まち」とは何かを考えてみる。

- ・「起」の形成経緯（明治以降の地域形成年表）
- ・「起産業コミュニティ」とは何か（「ものづくり」と「まちづくり」の融合）
- ・「まち」としての「起」の変遷（1956年、1982年、2015年の市街地図）

次は「まち」について。「まち」を知っている世代と知らない世代。僕は今枝さんの説明にある「まち」だった一宮を知りません。「まち」というのは娯楽施設の集まりという認識がありましたが、最近はその認識も変わってきたかと思います。与えられるシステムティックな娯楽から、自分で探しつける偶発的な喜びに、人の関心は向かっていると感じています。そうなると、名古屋のような都会でなくても十分に楽しめるし、むしろ自分で自分だけの「まち」を作っていく楽しみも付加されます。空白のノコギリヤネが多ければ多いほど、それが何かに化ける可能性が増えます。「まち」というのはその世代や人によって全く違う姿をしているものかもしれません。



3. “ノコギリヤネ”のこれから—新たな「ものがたり」を紡ぐ試み

① ものづくり・ものがたり・まちづくり

●近代化・工業化の「ものがたり」

- ・産業振興（ものづくり）のための生活基盤整備（まちづくり）
- ・「起・産業コミュニティ」という「近代化ものがたり」

●“ノコギリヤネ”の現在

- ・1連～3連で全体の約98%。1・2連でも約80%。
- ・工場制手工業。農家の副業。出機。
- ・イエに「家族と仕事」の問題が集約。

●「まち」の消滅

- ・「個人・家族」と「世界」の中間媒体としての役割を担っていた「まち」。
- ・郊外化（郊外への商業立地、宅地化等）に伴う「まち」の崩壊、消滅。
- ・世界に対峙せざるを得ない個人（核家族）
- ・ネット社会というリアリティ？

さて、映画『宇宙の法則』で描かれた“ノコギリヤネ”のお話とは・・・

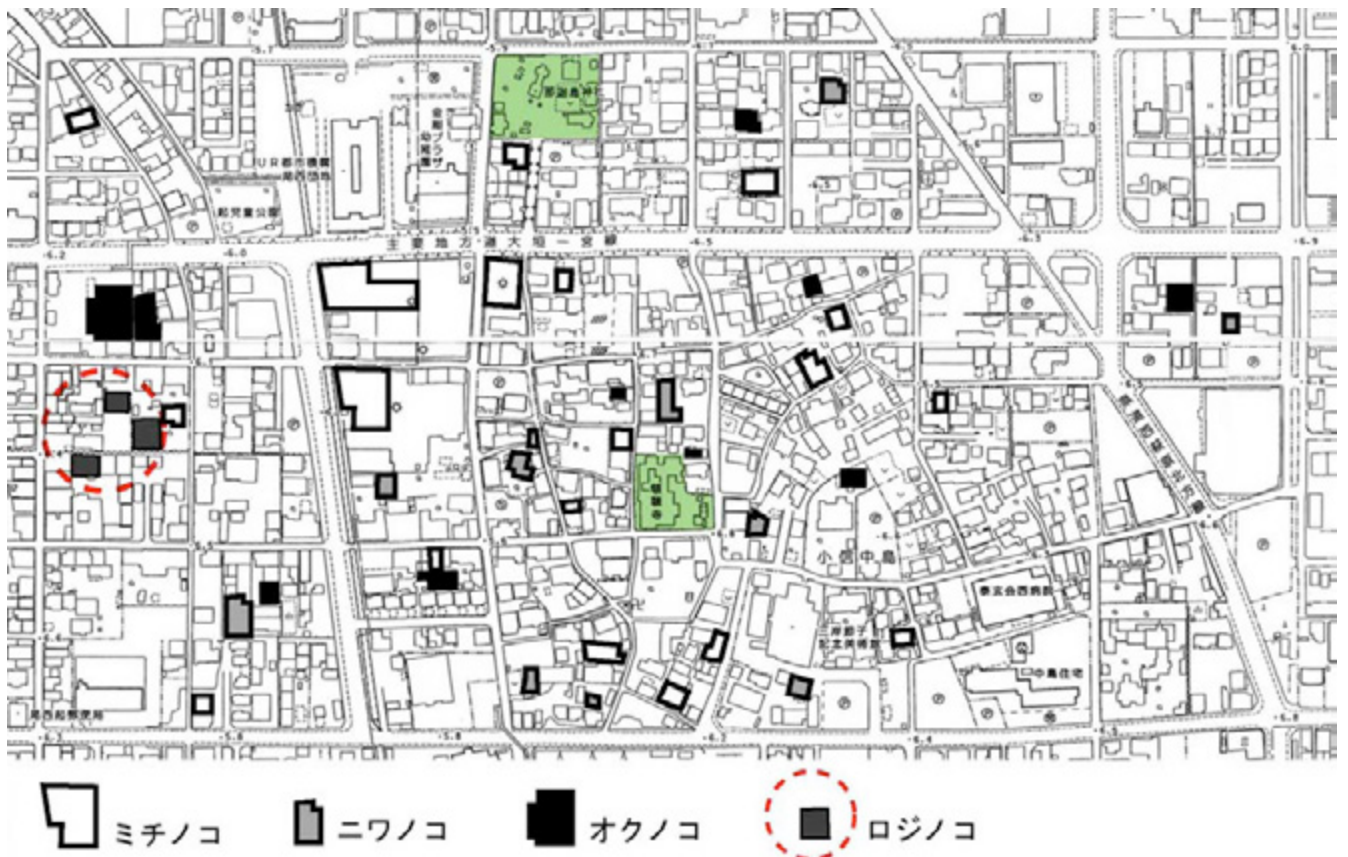


②ウツホモノガタリ

- ウツ（空）、ウツホ（空洞）の発生
 - ・ウツというカオス、生成力。ウツから何か
が移ろい出てくるのが、ウツロイ。
 - ・具体のイメージ（像）をとまなう仮設空間
という考え方。
 - ・「ブリコラージュ」（寄せ集めて自分でつく
る。ものを自分で修繕する。器用仕事など）

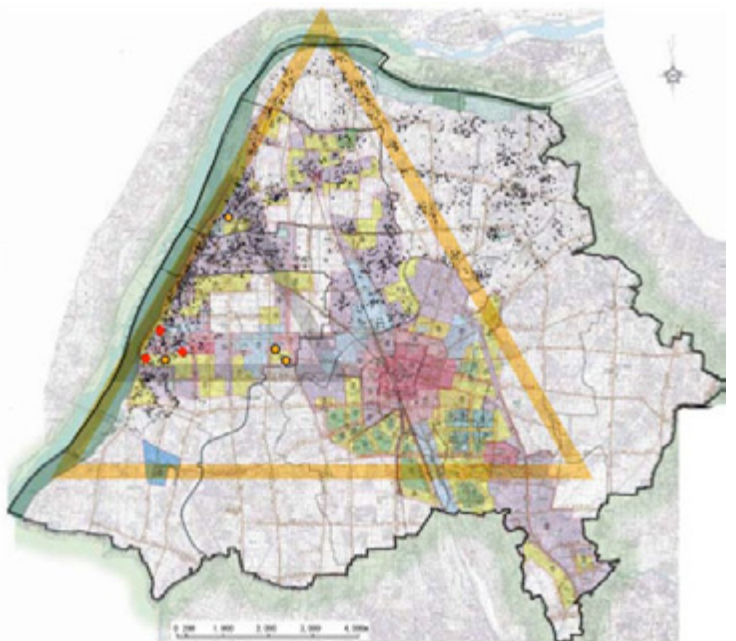
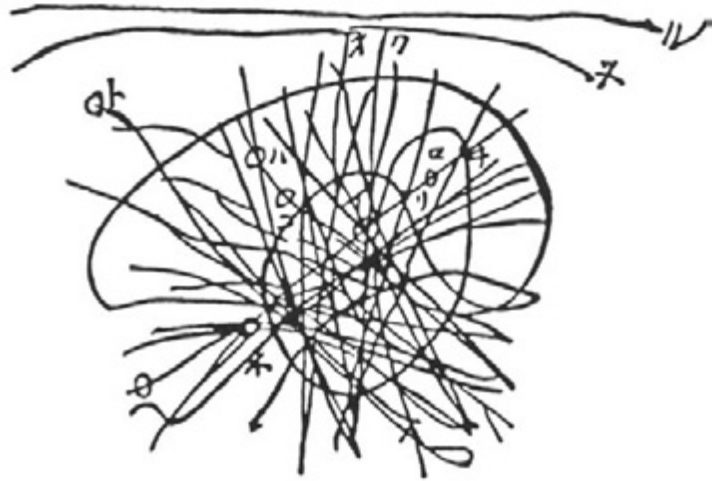
- 「イエノコ」から「マチノコ」へ
 - ・「イエ」に閉じた現状
 - ・「まち」に開く
 - ・「オープンダイアログ」（開かれた対話）

- 「ミチノコ」、「ニワノコ」、「オクノコ」
 - ・ミチ=マチ
 - ・セミパブリック・セミプライベート
 - ・「コンヴィヴィアリティ」（自立共生、いき
いきとした共生…）



③「萃点」としての“ノコギリヤネ”（まちのイメージ）

- 南方マンダラ（ミナカタ・マンダラ）
 - ・南方熊楠（1867—1941）。粘菌研究者。
 - ・仏教で宇宙の信実を表現する「曼荼羅」を独自に化学方法論モデルに読み替え。
 - ・萃点というアイデア。萃は「あつまる・あつめる」の意。まちに例えれば、人びとの出会い、交差点のようなもの。
 - ・中心を持たない日本の「まち」。
- 「ミヤイチ・マンダラ」（一宮マンダラ）
 - ・従来のような中心市街地都市構造ではなく、生活圏における交流拠点（萃点）の連環ネットワーク構造。
 - ・小学校を核としたコミュニティの再生イメージ。
- 「起マンダラ」の展開イメージ
 - ・起トライアングル（歴史民俗資料館、湊屋、三岸節子記念美術館・起工業高校）
 - ・起・竈屋・玉ノ井トライアングル（さらに木曾川・北方方面、一宮東部方面への展開）
 - ・一宮トライアングル（一宮市全域）



3. “ノコギリヤネ”のこれから - 新たな「ものがたり」を紡ぐ試み

「ものづくり」と「まちづくり」は表裏一体、不即不離。それを結びつける「ものがたり」。「起・産業コミュニティ」は、“ノコギリヤネ”のひとつの「ものがたり」である。いま、“うつ（空）”・“うつほ（空洞）”となった多くの“ノコギリヤネ”。その再生には、あらたな「ものがたり」が必要だ。二連・三連を主体とした“ノコギリヤネ”。それは、「家内制手工業」の現場であり、「家族」と「仕事」という大きなテーマを内包する。ここから“ノコギリヤネ”の新たな「ものがたり」を紡いでいこう。称して、「ノコギリヤネ・うつほモノガタリ」。

「まち」の全体像としての「マンダラ」。アイテムとして、ブリコラージュ、オープンダイアログ、コンビビアリティ…。既に「のこ座」は、そのいくつかを手に入れて、実践している。

- ・ まちづくり・ものづくり・ものがたり（うつほモノガタリ）
- ・ 家族と仕事
- ・ マンダラ、そして、ブリコラージュ、オープンダイアログ、コンビビアリティ…

一宮に現存しているノコギリヤネは8割以上が二連以下の小さな工場です。これが意味するものは「家族」です。家内制手工業から始まった一宮の毛織産業、ノコギリヤネ工場は家族とのつながりを抜きにしては語れません。では家族とはなんなのか、今後どうあるべきなのか。閉じた家族、開かれた家族。血の繋がった家族、そうでない家族。永続的な家族、仮設的な家族。家族にできること、家族ではできないこと。状況が大きく変わっていくであろう今後5～10年、家族のかたちを変えていかなければ、まちにとって大切なものを失うことになると思います。

先ほどの「家族」は全て「工場」に言い換えることができます。のこ座で工場に対して議論していることは、今後の家族のあり方を探っていることにもつながっているのだと痛感しました。ますます深い核心に迫ってきました。

平松毛織株式会社 平松久典

平松さんとワタシは、ちょうど親子ほどの年齢差があります。そのせいか、1年経った今でも、面と向かって話すことに戸惑いを覚えます。彼の作成する報告書とワタシの備忘録が、期せずして、形を換えた往復書簡となっているのかもしれませんが。それで今回は、ワタシの話の節目ごとに、彼との対話を入れてみようと思論みました。結果、適度な数の聞き手の方々も加わり、アットホームな感じで対話が進んだと思います。このノコギリヤネのおかげでしょう。「家族」の話なんて、かなり重いですよね。でも、「うつほ（空洞）」になったノコギリヤネには、そこから「物語」を紡ぐ「生成力」を感じます。ちょうど1年前に、はじめて「のこぎり二」に足を踏み入れて、それを予感していたのだと思います。これから、いくつのノコギリヤネが新しい時代の「まち」の「萃点（すいてん）」となるのでしょうか。そうです、「核心」に迫ってきました。でも、日本の社会構造は中心が「からっぽ」だから、複雑ですけどね。

今枝忠彦

追記：写真の片隅、何気に“ノコオニ”のポーラさんが写り込んでいるのが、いいネ！